

訳注『風月小誌』第三号（中）

要 木 純 一

11 杵築湾 朧月（杵築湾にて月を朧み）

盛穀 原田氏 出雲松江人

海面波平夕照閑。行舟相趁出晴湾。前帆已没後帆未。看入水天杳渺間。

老雨云。三四実景。

【訓読】海面波平らかにして夕照閑かなり、行舟相い趁つて晴湾より出づ。前帆已に没するも後帆は未だし、看るみる入る水天杳渺の間。

老雨云う。三、四は実景。

【大意】（杵築湾で月を眺める）海面の波が穏やかで静かに夕日が照っている。出航する舟は競つて晴れた港を離れる。前の方の船の帆はかなたに消えたが、後ろの方の船の帆はまだのこっている。そして、水と空のはるかに広がる水平線のかなたにみるみるうちに消えていく。

雨森精翁評。後半の転句、結句は、実際にその通りの景色である。

【注釈】○杵築湾 出雲大社の西側にある大社漁港か。湾は海や川の入り江のこと。港に適所。○朧月 朧は、（何かを求め、つながろうとして）じっと見つめること。晋書・桓温伝「中原を眺朧す」。○原田盛穀 未詳。本名ならば、もりよし。○『手向集』（中村四郎二編 明治二十三年刊 国会図書館蔵）に原田盛穀君の七絶を収める。○海面 鮑溶・采珠行「東方暮空海面平らかなり」。○波平 韓愈・僧澄観を送る「清淮波無く平かなること席の如し」。○夕照閑 黄庭堅・思賢「城郭参差として夕照閑たり」。○行舟 曹丕・善哉行「湯湯たる川流、中に行舟有り」。○相趁 杜甫・夔

州歌十絶句其五「相趁う鳧雛は蔣牙に入る」。○晴湾 邢巨・游春「琴酌晴湾に弄す」。○前帆已没後帆未 華岳・江上双舟発するを催す「前帆漸く緩なれば後帆急なり」。○看入 看は、じつと見ることだが、何もできないままにただ見るほかないのニュアンスがあり、みるみるやみすみすの訓のあるゆえん。張南史・司空十四の北のかた宋州に遊ぶを送る「白雲断たと欲するを愁う、看るみる大梁に入りて飛ぶ」。○水天 空と海の交わるところ、すなわち水平線。白居易・湖中に宿す「水天晚に向かいて碧沈沈たり」。○杳渺間 李白・西施「提携す館娃宮、杳渺として詎ぞ攀づ可けん」。白居易・長恨歌「山は虚無縹緲の間に在り」。

12 山居 淡翁 山中氏 出雲広瀬人

山中絶「塵事」。愛「静構」茅茨。家睦貧而樂。身閑賤最宜。濁醪堪「養」老。疎食足「充」饑。安「命」心常適。無「逢」不「自」怡。

蘭窓云。恬澹之情述得好。非「安」命者「則」不「能」道。

【訓読】山中塵事絶え、静かなるを愛し茅茨を構う。家睦まじくして貧しくして（而）樂し、身は閑かにして賤しきは最も宜し。濁醪老いを養うに堪え、疎食饑えを充たすに足る。命に安んじて心は常に適い、逢いて自ら怡ば（不）る無し。

蘭窓云。恬澹の（之）情述べ得て好し。命に安んずる者に非ざれば、則ち道う能わず（不）。

【大意】（山の住まい）この山中では、俗塵にまみれることも絶えてないので、静寂を好んで、あばら家を建てた。家族は仲良く暮らしており貧しいけど楽しい、私はのんびりとして、くらいは低いがここが一番いい。どぶろくで老後は十分生きていける。粗食でも飢えをみたすのには十分だ。我が運命に安んずれば、心はいつも快適、出会うことすべてに自分自身で楽しみをみつけている。

阪本蘭窓評。名利に恬淡とした気分がうまく表現できている。運命に安んずる人でなければ、こんな詩は作ることができない。

【注釈】○山居 山に住むこと、山の住居。史記・滑稽伝・優孟伝「山に居り田を耕すは苦し」。謝靈運に「山居賦」有り。その序に「古え・・・棟宇もて山に居るを山居と曰う」。○山中淡齋 広瀬藩儒。山中幸武。山村良顯に学び後林氏門に入り江戸邸教授となる。著書「小学合璧」(『広瀬町史』等)。○塵事 俗事。陶潜・辛丑の歳七月假に赴き江陵に還つて夜塗口を行く「閑居三十載、遂に塵事と(与)冥し」。張説・雨を聞く「雨多くして塵事を絶す」。○愛静 陸龜蒙・襲美の新秋言懷三十韻に和し奉り次韻す「身閑にして唯だ静かなるを愛す」。○構茅茨 屋根をチガヤとイバラでふいた質素な家を建てること。構は構に同じ。孟子・告子下「吾れ聞く秦楚兵を構うと」。邱為・西山の隱者を尋ぬるも遇わ不(ず)「絶頂一の茅茨」。劉敞・雜詩其九「野人茅茨を構う」。○家睦 禮記・坊記「父母の(之)党に(於)睦まじきは、孝と謂う可し矣」。○貧而樂 論語・学而「子貢曰く、貧にして諂う無く、富みて驕る無きは何如と。子曰く、可なり、未だ貧にして樂しみ、富みて礼を好む者に若かず」。○身閑 皎然・山居、靈澈上人に示す「身閑にして始めて覺ゆ名を擲ることの是なるを」。○濁醪 もろみ入りの安価な濁り酒。清酒に對していう。左思・魏都賦「濁醪河の如し」。○堪 可(仄声)の代わりに平声として用いる。○養老 本来は優れた老人に酒食を与える礼(『礼記』王制)。後に、老人自身が安樂な隱居を樂しむ意に使われるようになった。○疎食 論語・述而「疏食を飯いて水を飲み、脰を曲げて之これを枕とす」。粗食の意。日本では、朱子の音注などにより、食をシと読み習わす。○足充饑 杜甫・独坐二首其一「飢えを充たすは楚萍を憶う」。白居易・内に贈る「蔬食飢えを充たすに足る」。○安命 鮑照・園葵賦「盪然として心に任せ、道を樂しんで命に安んず」。○心常適 徐鉉・李著作漢陽に之くを送る「遠宦心は常に適す」。○無逢不自怡 逢字不審。吳均・使を廬陵に奉ず「悵然として自ら怡ばず(不)」。○恬澹 老子「恬淡上と為す」。阮籍・詠懷其七十三「恬澹貧に安んずるを志す」。

13自「美保閑」婦舟中作 (美保閑自り帰る、舟中の作) 枕水 山根氏 出雲松江人
鳥霧汀煙次第晴。波平海面鏡如明。江山倒蘸清灣水。舟在「丹青画」上一行。
蘭窓云。三四奇警驚人。

【訓読】 島霧汀煙次第に晴れ、波平かにして海面鏡の如く明らかなり。江山倒まに蘸す清湾の水、舟丹青画上に在りて行く。

蘭窓云う。三、四奇警にして人を驚かす。

【大意】（美保関から帰る時船中で作った詩）島々を隠す霧、浜の靄が、進むにつれてだんだんと晴れていき、波はまっ平らで海面は鏡のようだ。川沿いの山がきよらかな湾の水にさかさまに映っている。船はあたかも青色、赤色とりどりの絵画の中を突き進んでいくようだ。

阪本蘭窓評。転句と結句は、奇矯でびつくりさせる表現。

【注釈】 ○自美保関帰舟中作 陸游に「晩に帰る、舟中の作」等の詩題あり。現島根県松江市美保関町。江戸時代に北前船交易の要所として繁栄。海路、現松江市の北の港に向かったか。例えば、恵曇港からは佐陀川を通って宍道湖に抜けることができる。○山根枕水 未詳。沈水の号から、宍道湖畔や松江の川のほとりに住んでいたと推測される。○島霧 宇都宮龍山・吉祥院にて迂叟を留めて話す「老いを投ず汀烟嶋霧の間」。○汀煙 杜甫・寒食「汀煙輕きこと冉冉たり」。○次第晴 杜牧・華清宮を過ぐ絶句三首其一「山頂の千門次第に開く」。○波平 前出。○海面 鮑溶・采珠行「東方の暮空海面平らかなり」。○鏡如明 明如鏡の倒置か。返り点がないので、鏡の如く明らかなりと読ませるつもりか。庾信・塵鏡「明鏡如明月」。隋無名氏・寿陽樂「梁長くして曲水流る。明かなること鏡の如し」。○江山 本来、江と山だが、湖山同様、ここでは、山に焦点があるようである。莊子・山木「彼の其の道は遠くして（而）險し、又江山有り。我舟車無し、奈何せん」。杜甫・鑿石浦に宿る「仲春江山麗し」。海山は、詩語としてこなれていないので（中国は大陸国）、海の代わりに江を用いたか。○倒蘸 釈德洪・彦周詩を以て寄せら（見）る 次韻「池閑にして鏡の空なるが如く、倒蘸す垂楊の影」。○清湾 沈佺期・峽山に遊ぶ「一水清湾を抱く」。柳宗元・法華寺西亭を構う「澄江清湾を抱く」。○舟在 李白・王屋山人魏萬王屋に還るを送る「舟は空中に在りて行く」。○丹青 赤や青の絵具。引いて、絵画。晋書・顧愷之伝「尤も丹青に善く、図写特に妙なり」。○奇警驚人 奇警は、奇抜、機敏なさま。宋史・王珪伝「珪は弱歳にして奇警、出語人を驚かす」。

14 秋日溪居 瘦篁 小林氏 仝所人

葉様扁舟是我家。一竿風月寄生涯。沙禽声冷秋將老。滿岸西風乱荻花。

蘭窓云。秋意可^レ愛。宜乎寄^二生涯^一。

【訓読】葉様の扁舟はれ我が家、一竿の風月生涯を寄す。沙禽声冷やかにして秋は將に老いんとす、満岸の西風荻花を乱す。

蘭窓云う。秋意愛すべ（可）し。宜なるかな（乎）生涯を寄すること。

【大意】（秋のある日、谷間のすまい舟で）葉っぱのような小舟こそ、わが住まい。一本の釣竿を操る風流に、人生のすべてをかける。砂にたたずむ鳥が、冷たい声で鳴く、秋は老いて去つていこうとしているのだ。兩岸いっぱい西風が、荻の花を吹き乱している。

阪本蘭窓評。秋の気分が、すばらしい。なるほど、人生をこれにかける価値があるね。

【注釈】○秋日溪居 裴度に、溪居詩あり。王庭圭に、次韻趙逢源秋日溪居十絶詩あり。○小林瘦篁 不明。陸游・山園觸目を書く「瘦篁石竈を穿つ」。○葉様 眉の形容だが、晏幾道・浣溪沙「粧鏡巧眉葉の様を偷む」。葉舟は小舟。薛道衡・敬して楊僕射の山齋独坐に酬ゆ「葉舟旦旦に浮かぶ」。○扁舟 小舟。漢書・貨殖伝「乃ち扁舟に乗る」。王昌齡・盧溪主人「武陵溪口扁舟を駐む」。○是我家 王昌齡・河上老人歌「口に道う滄溟是れ我が家」。○一竿風月 俗世を離れて、釣りをしながら、自然を楽しむこと。陸游・感旧「首を回らせば壯遊真に昨夢、一竿の風月南湖に老ゆ」。○寄生涯 劉長卿・湖南の羊处士の別業を過ぐ「湖上生涯を寄す」。○沙禽 川の砂辺や砂洲にすむ鳥。陰鏗・傅郎の歲暮湖州に還るに和す「沙禽過かにして未だ驚かず」。○声冷 韋応物・山行、積雨帰途始めて霽る「深林猿聲冷やかなり」。○秋將老 杜甫・簡を高三五使君に奉る「行色秋將に晩ならんとす」。張耒・冬日雜書六首其一「地僻にして秋將に老いんとす」。○滿岸 韋莊・贈漁翁「滿岸の秋風枳橘に吹く」。○西風 秋風。李白・長干行二首之二「八月西風起つ」。○乱荻花 齊己・荆門にて人の峨帽自り南岳に遊ぶを送る「西風荻花を乱す」。○秋意 顏真卿・僧皎然に贈

る「秋意西山に多し」。韋心物・夜省中に直す「河漢に秋意有り」。○可愛 書經・大禹謨「愛す可きは君に非ずや」。敬愛の気持ちを含む。○宜乎 理屈として、よろしきを得ていることを倒置的に述べる言い方。乎は感嘆して息を出す語気。蕭統・陶淵明集序「寄寓は之を逆旅と謂う、宜なる乎大塊と（与）而して榮枯すること」。

15 挿^レ秧（秧を挿す）

榴窓 永井氏 名博孝 字士和 仝所人

野婦村姑交^レ作^レ行。笠蓑衝^レ雨挿^レ秧忙。童歌翁鼓頻相励。百畝平田一刻蒼。

竹園云。無^レ適無^レ莫者乎。

【訓読】野婦村姑交も行を作し、笠蓑雨を衝いて秧を挿すこと忙し。童歌翁鼓頻りに相い励まし、百畝の平田一刻にし

て蒼し。
竹園云う。適する無く莫する無き者乎。

【大意】（田植え）田舎の奥さんやおばさんたちが互いに列を作り、笠や蓑をつけて、雨の中田植えに忙しい。しきりに、子供がうたい、爺さんが太鼓を打って励ましている。百畝ひろがる田圃が一刻のうちに青々となった。

渡部竹園評。作者は付かず離れずでみているのだろうか。

【注釈】○挿秧 高適・広陵にて鄭処士に別る「江田插秧に耐う」。○永井榴窓 不詳。永井博孝の名は、心の華、新題歌集、類題採芳集などの、明治時代の歌集に見える。○野婦 王績・春莊筆を走らす「野婦中饋を調す」。○村姑 田舎娘（姑娘）をいう場合が多いが、婦との対から、しゅうとめの意であろう。蔡伸・長相思「村姑児。紅袖衣」。○交作行 交作は次々となる、おこる（おこす）こと。于邵・李員外の入朝するを送る序「広庭樂を張り、妙音交も作る」。陽韻なので、行は行列の意味。○笠蓑 蓑笠が一般的だが、平仄の関係でひっくり返した。柳宗元・江雪「孤舟蓑笠の翁」。劉宰・陳居士に奉酬す「盍ぞ滄浪に向かつて笠蓑を具えざる」。○衝雨 李端・別駕の晋陵に赴くを送る、即ち舍人叔の（之）兄「江帆雨を衝いて上る」。陸游・致仕後述懷六首其一「雨を衝いて帰り来ること晚し、山花笠に満ちて紅なり」。○挿秧忙 趙蕃・安仁自り豫章に至る途中の雜興十九首其十九「秧を種うること未だ了らざるに秧を挿すこ

と忙し」。○相励 李翱・江州南湖堤銘「婉歛相励」。○百畝 畝は、中国の伝統的な面積単位。百畝は約6ヘクタール強だが、田地が広大なことを表す。楚辞・離騷「余既に蘭の（之）九畹を滋す兮、又蕙の（之）百畝を樹す」。○平田杜甫・茅堂にて収稲を檢校す二首其一「平田百頃の間」。○一刻蒼 伝蘇軾・春夜「春宵一刻值千金」。○無適無莫 論語・里仁「子曰く、君子の天下に於けるや、適も無く、莫も無し。義に之与に比ぶ」。適はゆく、近づく。莫はそうしないこと。付かず離れずの語感で用いているか。心動かされつつも、客観的な描写であろうとしていることをいうのか。適の漢音はセキ。嫡子の意の時のみ、テキと読む。慣用音に従った。

16 秋夜

臨齋 秋庭氏 全所人

幽庭風断樹声乾。琢句閑凭卮字欄。夜半霜飛山月白。籬辺殘菊晚香寒。

編者云。極冷澹之致。

【訓読】幽庭風断え樹声乾く、句を琢き閑かに凭る卮字の欄。夜半霜は飛んで山月白し、籬辺の殘菊晚香寒し。

編者云。冷澹の（之）致を極む。

【大意】（秋の夜）静かな庭、風の音がやみ、落葉の乾いた音が聞こえる。冗くずしの欄干にもたれかかって、黙って詩作の推敲をする。夜半、霜が空中を飛んで、白々とした月が山の端にかかる。垣根に枯れかかった菊が、夕方冷たい香りを放っている。

編者平賀静遠評。冷たい枯れた感じを極限まで表現している。

【注釈】○秋庭臨齋 不詳。松江藩藩医秋庭氏の系統か。○幽庭 鮑照・園中秋散「幽庭夕寒を憐れむ」。○風断 本来は、風が何かを断ち切る場合に使う表現。范雲・效古「風は断つ陰山の樹」。ここは、風がたえてなくなるの意で使っているであろう。○樹声乾 岑参・虢州西亭端公の宴集に陪す「地を踏めば葉聲乾く」。馬臻・謾成四十二首其四「新霜尚お薄く樹声乾く」。風がたえたのち、木の葉の落ちるカサカサした音が目立つということか。○琢句 貫休・匡山の紀公に寄す「句を琢く終身に似たり」。○閑凭 凭は憑に同じ。李紳・揚州の水館に宿る「閑かに欄干に凭って星漢

を指す」。○卅字欄 卅字くずしの欄干。袁宏道・初夏江進之と共に孫内使の池台に坐し、感じて賦す「亭は開く卅字の欄」。○夜半 周邦彦・蝶恋花其四商調柳「夜半霜寒くして初めて酒を索む」。○霜飛 夜半には空中を霜の粒子が飛び、朝には地面に落ちると考えていた。王昌齡・九日登高「霜天苑に飛び御梨秋なり」。張繼・楓橋夜泊「月落ち烏啼いて霜天に満つ」。○山月白 武元衡・出塞作「笳を奏するに山月白し」。○籬辺 陶淵明・飲酒二十首其五「菊を採る東籬の下」が想起される。杜甫・秋尽く「籬辺老却す陶潛の菊」。○殘菊 唐太宗・賦して殘菊を得たり「殘菊猶お露を承く」。○晚香寒 晚香は韓琦・九日水閣「且く看ん寒花の晚節香るを」によつて、菊を指すようになったという。謝逸・仲邦菊花を恵む、詩以て之に戯むる「霜蕤猶お帯ぶ晚香の寒きを」。○冷澹 冷淡に同じ。人に対して冷たい態度という意味ではなく、末枯れた、寒々しい趣き。○致 傾向を行くところまで（最大限）行かせることで、日本語のおもむきと同ニユアンス。

17 秋朝 杏園 松本氏 出雲本庄町人

夜来風雨過。園菊花狼藉。早起喚家僮。丁寧修竹柵。

蘭窓云。真個愛菊者。可謂五柳先生好友。

【訓読】夜来風雨過ぎ、園菊花は狼藉たり。早起して家僮を喚び、丁寧して竹柵を修めしむ。

蘭窓云。真個に菊を愛する者。五柳先生の好友と謂う可し。

【大意】（秋の朝）昨夜は風雨がひとしきり強かった、庭の菊はめちやくちゃだ。早起きして、召使に細かく指図して、竹の柵を修理させた。

阪本蘭窓評。本当に菊が好きなんだ。五柳先生（陶淵明）の親友といえよう。

【注釈】○秋朝 詩題としては少ない。薛稷・秋朝鏡を覽る、など。○松本杏園 未詳。医者か。○本庄町 現松江市。中海北岸。○夜来風雨過 孟浩然・春曉「夜来風雨の声」。白居易・落花を惜しむ「夜来風雨急なり」。韋応物・広陵を發す……「蕭条として風雨過ぐ」。○園菊 謝惠連・衣を搗く「白露園の菊を滋す」。○花狼藉 羅隱・雪溪晚泊裴庶

子に寄す「野花狼藉たること當時に似たり」。狼が草むらで休むと、そのあとが滅茶苦茶に乱れることから、という語源説がある。史記・滑稽伝・淳于髡伝「杯盤狼藉す」。○家僮 男の子の召使。高適・鮮于洛陽とともに畢員外宅に於いて画馬を観る歌「家僮愕視して先ず鞭せんと欲す」。○丁寧 再三、くどくどと頼むこと。樂府の孔雀東南飛「府吏に丁寧せ見る」。○竹柵 李賀・南園「草梢竹柵池痕を鎖す」。○五柳先生 陶淵明を指す。陶淵明の自伝的作品「五柳先生伝」による。「宅辺に五柳樹有り、因て以て号と為す焉」。陶淵明は菊を愛した。○好友 詩経・小雅・車轄「好友無しと雖も、式て燕し且つ喜ぶ」。

18 雪中探梅（雪中梅を探る）

瓦全居士 天野氏 名寵 字祖榮 出雲松江人

行尽林垆又水隈。吟筇不厭雪成堆。香風細々薰衣袂。認得橋南一樹梅。

苔洲云。一篇詩語碎金作例人皆輕之。僕則以為二詩上乘。○老雨云。苔洲所三以為二詩人一在此。僕大服此評。○訓詁 行き尽す林垆又水隈、吟筇厭わず（不）雪堆を成すを。香風細々として衣袂を薫らす、認め得たり橋南一樹の梅。

苔洲云。一篇は詩語碎金の作例、人皆之を輕んず。僕は則ち以て詩の上乗と為す。○老雨云。苔洲の詩人為る所以は、此に在り。僕は大いに此の評に服す。

【大意】（雪の中梅を探しに行く）郊外の林を通りすぎるとまた水のほとりに出る。詩作のために、杖を突いて、雪が積もってもかまわずにでかけることにする。よい香りがする風がそよそよと吹いてきて袂を薫らせる。見つけた、橋の南にひとつの梅がある。

河野苔洲評。この詩は『詩語碎金』の作例そのままで、（よくあるパターンと）人はみな馬鹿にするかもしれぬが、私はそうは思わぬ。上々の出来栄えだと思ふ。雨森精翁評。河野苔洲さんが詩人の中の詩人であるといえるのは、こういう点にある。私はこの評に大いに敬服する。

【注釈】○雪中探梅 曾幾に「諸生に効つて雪中探梅を作る」詩あり。○天野瓦全氏 画家、天野嗽石（一八三七〜？）

と思われる。松江宇賀明王院の二男。松江灘町に住んでいた。花鳥画を得意とした。明治十七年、第二回内国絵画共進会に山水、花鳥を出品している。のちに各地を遊歴し、四国松山に一時住んだとされるが、没地などは不明（『島根県人名辞典』）。○行尽 王維・桃源行・青溪を行き尽くすも人を見ず（不）。○林垞 郊外の荒野。郊野。文選・陳琳・曹洪の為に魏文帝に与える書「夫れ綠驥は耳を林垞に（於）垂る」。その李善注に『爾雅』を引いて「野外之を林と謂い、林外之を垞と謂う」。○又水隈 川が曲がったところにある岸辺。李嶠・鳧「浮遊す漢水の隈」。○吟筇 詩人のつく杖。聶鉄峰・武夷に寄題す「吟筇尚お帶ぶ瑤階の薜」。○雪成堆 蘇軾・望海樓晚景五絶其一「樓前指顧す雪堆を成すと」。○香風 賀循・賦して庭中有奇樹を得たり「香風飄舞して花間を度る」。賀鑄・曹氏の園を過ぐ、馬上の作「香風細細重牆を出づ」。○細々 杜甫・宣政殿朝を退き、晩に左掖に出づ「鑪煙細細として遊絲を駐む」。○薰衣袂 衣袂は、本来は服の袖のことであるが、広く服全体を指すようになった。許篈・前澗「花氣衣袂を薰らす」。○認得 今まで認識していなかったものに気づくこと。劉禹錫・秋日竇員外の崇德里の新居に題す「認め得たり詩人の此の間に在るを」。○橋南 南字に温かさをこめる。○一樹梅 杜牧・早春岳州李使君杜牧・早春岳州李使君に寄す「寒香一樹の梅」。○詩語碎金 詩語碎金は、泉要編纂。主に各季の詩題について、二字の熟語を集めた、作詩の参考書。詩題にふさわしい詩を作ることができるが、月並みとなってしまう。たとえば、冬日見梅の項には、吟筆、倚杖、臨水、冒雪、渾疑、寒香、野橋等、この詩と同傾向の語が並んでいる。それでも、守旧、平凡のそしりを恐れず、独創を捨てて、伝統的に認められた詩語や表現の世界に身を浸すことも、作詩には必要だと苔洲はいいたいのであろう。碎金は短編の佳作の意。晋書・謝安伝「温は嘗て謝安の作る所の簡文帝諡議を以て以て坐賓に示して曰く、此は謝安石の碎金也」。○作例 詩文などの、作り方の実例や手本。日本語的用法ではないか。中国語では、例と作（な）すと読むのが普通。○上乘 本来は仏教語、大乘のこと。小乗を下乗というのに対し、大乘を上乗という。宝積經「諸父如来、正真正覚、行う所之（の）道、彼の乗名づけて大乘と為し、名づけて上乘と為す」。引伸して、佳作、優れたものをいう。李贄・雜説「雜劇院本は、遊戲の（之）上乘也」。○所以為詩人 中庸「蓋し文王の（之）文と為す所以を曰う也」等の表現が意識にあっただろう。○大服 左伝・僖公二十八年「民是に於いて大いに服す」。

19 夏日錦莊小集

分レ韻得^レ文（韻を分ちて文を得たり）

勝田 保興 睡仙男

松竹^レ窓鎖^レ夕暉^一。緑陰深處^レ絶^レ塵紛^一。群蛙声急天将^レ雨。望裏湖山半是雲。

中村笠山云。平淡佳境。

【訓読】松竹窓を^レ閉んで夕暉に鎖さるる、緑陰の深處塵紛を絶つ。群蛙声急にして天将に雨ふらんとす。望裏の湖山半ばは是れ雲。

中村笠山云。平淡たる佳境。

【大意】（夏のある日、別荘錦荘での小さな詩会　くじを引いて、上平十二文の詩韻が当たった）松や竹が窓を覆つて、まわりは夕陽ばかりとなった。この別荘は、木陰の奥深くにあつて、ごみごみとした世間から隔絶している。蛙の群れの声が高くなつた。雨が降ろうとしている。視野に入る湖の周りの山々は半分が雲に覆われている。

中村笠山評。穏やかですつきりとした、素晴らしい境地の詩。

【注釈】○錦荘 勝田睡仙が営んだ錦霞荘。その広大さで有名であつた。○勝田保興 この書の睡仙（千之助）の子。後に鶴堂と号する。剪淞吟社社員。○松竹 郭璞・温嶠に贈る「人亦た言う有り、松竹林有り」と。隱者の高潔の象徴としてしばしば用いる。○窓 宇文虛中・四序回文十二首其一「翠密なり窓を^レ閉む竹」。○鎖 とざす、とざさるの両様の読みが可能だが、とざさるが優勢。要するに、ある風景がそだけ孤立している雰囲気。○夕暉 夕陽の余光、残照。謝靈運・晩に西射堂に出づ「夕暉嵐氣陰なり」。張之翰・春を送る九絶其五「多少の朱門夕暉に鎖さる」。○緑陰深處 賈島・陝府王建司馬を送る「舫を移して緑陰深き處にて息う」。○絶塵紛 顔延之・夏夜從兄散騎車長沙に呈す「暑晏塵紛に^レ関ざさる」。多く俗塵のニュアンスで用いる。范曄・逸民伝論「蓋し其の絶塵及ばざるを録す」。朱熹・題を咸清精舍清暉堂に寄す「高唱塵紛を絶す」。○群蛙 羊士諤・南池晨望「群蛙一鳴を試みよ」。○声急 顔延之・秋胡行其九「声急なるは調由り起こる」。○天将雨 雨は動詞。陸游・即事八首其五「魚鱗群れて出で天将に雨ふらんとす。蛙鼃争いて鳴き草庭に満つ」。○望裏湖山 賈賓王・郷を望んで夕べに泛ぶ「憂いは望裏に従いて寛し」。夏日葵・

中秋三日駕湖にて月を詠む「望裏の湖山遠近迷う」。湖山は、本来湖と山の複合語だが、湖の周囲の山を中心に意識する。孟浩然・九日龍沙の作、劉大愼虚に寄す「湖山興を発すること多し」。○半是雲 姚合・陳偶の江陵従事に赴くを送る「山路の塵埃半ばは是れ雲なり」。○中村笠山 既出。○平淡 平澹。平凡で奇抜なところが無いが、また、あつさりとした味わいがあること。韓愈・無本師の范陽に帰るを送る「往往にして造ること平澹なり」。○佳境 劉義慶・世説新語・排調「顧長康甘蔗を啖うに、先ず尾を食す。所以を問う。云う、漸く佳境に至る」。

20 春晚

春坡 渡邊氏 隱岐人

無復黃鶯奏^ニ艷歌^一。湘波簾外夕陽斜。女兒也惜春風老。相喚相呼拾^ニ落花^一。

竹園云。凄婉可^レ誦。

【訓読】復た黄鶯の艷歌を奏する無し、湘波簾外夕陽斜めなり。女兒も也た惜しむ春風の老いたるを、相い喚びて相い呼び落花を拾う。

竹園云う。凄婉誦す可し。

【大意】（春の暮れ方）鶯が恋の歌をかなでることはもうない。竹簾に夕日が斜めにさしている。春風が老いて死んでいくのを、女の子たちもかなしんでいるのか。お互いに叫びながら、地面に散った花びらを拾っている。

渡部竹園評。なんてなまめかしい作品、何べんでも朗誦すべきだ。

【注釈】○春晚 晩は日暮れ時をいう。○渡邊春坡 渡邊新太郎（一八五四―一九二九）。隱岐の教育者、政治家。明治初期、小学校長就任、大阪に遊学（藤沢南岳門下）。明治十二年、崎郵便局長。その後、隱岐汽船等、実業家として活躍。衆議院議員や海士村長をつとめる。剪淞吟社社員。（『島根県人名辞典』等）○無復 無を双声・疊韻で二字に引きのばした語だが、今後二度とないのニュアンスで用いる。子夜歌「復た相関の意無し」。○黄鶯 本来はコウライウグイスで日本のウグイスとは別種で鳴き声（チュンチュン）と色が違うが、ここは日本のウグイスを想定してよい。○艷歌 本来は古楽府の艷歌行の略称で、悲しいメロディであつたらしいが、後に恋愛歌一般を指す。ここは、鶯の鳴き声

のこと。梁武帝・子夜歌二首之二「朱口艷歌を発す」。○湘波簾 湘簾のこと。本来は湘妃竹で編んだすだれ。舜が死んだときに、彼の二人の妃、娥皇と女英が、悲しみのあまり、湘水に身を投じて死んだ（後に湘水の女神、湘妃となる）。その時、流した涙が竹の皮に注がれて斑点となり、湘妃竹となったという伝説がある。范成大・夜宴曲「明瓊翠帶湘簾の斑」。ここは、竹製の簾一般をいうであろう。○夕陽斜 劉禹錫・烏衣巷「烏衣巷口夕陽斜なり」。○女兒 劉希夷・白頭吟「洛陽の女兒顔色を惜しみ、行くゆく落花に逢つて長嘆息す」。○也惜 陸游・春日六首其四「老人も也た惜しむ早春の時」。○春風老。春（風）が老いるとは、晩春、旧暦三月のこと。岑參・韓樽の相い過ぎるを喜ぶ「三月瀾陵春は已に老いたり」。白居易・清明の日妓の舞を觀て客の詩を聴く「惜しむ可し春風の老ゆるを」。○相喚相呼 釈重顯・頌一百則其七十二「相喚び相呼び歸りなん去来（いざ）」。○拾落花 王翰・春女行「行くゆく落花を拾つて容色を比ぶ」。○凄婉 ぞつとするほどなまめかしいさま。哀切の意で用いているかもしれない。新唐書・張説伝「既に岳州に謫せらる。而して詩も亦た凄婉。人謂えらく、江山の助を得たりと云う」。

21 十日菊

淞陽漁士 奥田氏 出雲松江人

陶家三径未「全荒」。留得東籬晚節香。若有「白衣」来送「酒」。一杯更醉小重陽。

蘭窓云。前日之酒尚在焉。何待「白衣」来一。

【訓読】陶家の三径未だ全くは荒れず、留め得たり東籬晚節の香。若し「白衣」の来りて酒を送る有らば、一杯更に酔わん小重陽。

蘭窓云。前日（之）酒尚お在り焉。何ぞ「白衣」の来たるを待たん。

【大意】（九月十日の菊）陶淵明の家にあるような、三つの小道は、まだすべてが荒れているわけではなく、東の垣根の、晩節を象徴する菊の香りだけとはとめている。昔、重陽の節句に白い服を着た使者が陶淵明に酒を送ったというが、そんなことが私にもあれば、翌日の小重陽の日もさらに一杯飲んで酔っ払いいたいものだ。

阪本蘭窓評。前日の酒がまだ残っているんだから、白い服を着た使者なんか待つ必要はありませんね（高潔な隠者な

んだから、飲み過ぎるなんてことはないだろう。

【注釈】○十日菊 十日は、重陽の節句旧曆九月九日の翌日。重陽に引き続いて、菊花を楽しむ（後述）。唐の薛瑩、鄭谷に十日菊題の詩あり。○奥田崧陽 不詳。○陶家三径未全荒 陶淵明・歸去來の辞「三径荒に就く」。三径の語は、前漢の蔣詡が、隱遁して、庭に三筋の径（こみち）をつくり、松・菊・竹を植えた故事。隱者の象徴。○東籬 陶淵明・飲酒二十首其五「菊を採る東籬の下」。○晚節香 自分や陶淵明の晚節を指すとともに、菊の花が枯れる前の香りをいう。韓琦・九日水閣「且く看ん寒花の晚節香をを」。○白衣來送酒 白衣送酒。酒好きの陶淵明が重陽の節句に酒がなく、庭の菊を摘んでたらずでいたところ、刺史王弘が白衣の人（無官の使用人の服装）を遣わして、酒を送つて來た故事（宋書・陶潜伝）。○一杯更醉 張鎰・夜坐して放歌す、興を書く「一杯更に酔いて床に投じて睡る」。○小重陽陰曆九月十日、重陽の節句の翌日に再び觀菊の宴を催すこと（『歲時広記』所引『歲時雜記』）。李白・九月十日即事「昨日登高し罷り、今朝更に觴を拏ぐ。菊花何ぞ太だ苦しむ、此の両重陽に遭う」。一般には、こちようようと読む。○前日の酒尚在焉 お酒が残っていることか。あるいは、酔いが残っていることか。

22雨中探_レ梅図（雨中梅を探る図）

緑香散史 平林氏 出雲意宇郡人

前宵俄暖雪初消。泥路探_レ梅豈厭_レ遙。好是香風吹不_レ断。一蓑春雨渡_二溪橋_一。

蘭窓云。無_レ限風趣。

【訓読】前宵俄かに暖かくして雪初めて消え、泥路梅を探るに豈に遙かなるを厭わん。好し是れ香風吹いて断えず（不）、一蓑の春雨溪橋を渡る。

蘭窓云。限り無き風趣。

【大意】（雨の降る中梅を求める人を描いた絵に）昨夜は急に暖かくなって雪が解け始めた。梅を探してぬかるみ道を遠きをいとわず歩く人。すばらしい、梅の香りが絶えることなく吹いてきた。蓑をつけた画中の人は、春雨に全身濡れながら谷間の橋を渡っていく。

阪本蘭窓評。無限のおもむきがある。

【注釈】○雨中探梅図 宋代より探梅詩や探梅画がよく作られるようになった。雪中探梅題の詩画はよくあるが、雨中探梅題は珍しいのではない。清の宋荦に雨中元墓探梅という詩がある。○平林綠香 不詳。神官平林家と関係があるか。李賀・李夫人歌「綠香の繡帳何れの時か歇まん」。○散史 散人と同様、ぶらぶらしている隠者（知識人）。○意字郡 律令制以来の郡。現在松江市南部（一部安来市）。明治十二年郡区町村編制法の施行により行政区画としての意字郡が発足。明治二十九年郡制の施行により、島根郡・秋鹿郡と合併して八束郡となる。○前霄 霄は、本義は天の意だが、ここでは宵に通じて用いる。左伝・襄公十年「霄に頰を渉り楚人と（与）盟う」。○俄暖 詩語としては多く忽を用いるが、平仄の関係か。○雪初消 李商隐・柳「江南江北雪初めて消ゆ」。○泥路 王令・餓者行「雨雪止まらず（不）泥路迂なり」。○好是 素晴らしいのは、の意。○香風吹不断 李白・廬山瀑布の水を望む二首其一「海風吹いて断えず（不）」。丁鶴年・水仙花二首其一「怪しむ底は香風吹いて断えず（不）」。○一蓑春雨 鄭谷・筆を試みて偶ま書く「殷勤す一蓑の雨」。王禹偁・再び吳江に泛ぶ「一蓑の疏雨漁人に属す」。方岳・田頭其二「一蓑の春雨自ら桑を農す」。○渡溪橋 温庭筠・菩薩蛮其十三「春水溪橋を渡る」。○風趣 謝赫『古画品録』戴逵「情韻連綿として、風趣巧拔なり」。

23題画 桓斎 神山氏 出雲広瀬人

茅屋両三煙竈間。鬱葱茂樾隔三塵寰。一。溪辺時見曳筇客。応は是前村沽酒還。

蘭窓云。合作。○又云。使二汝陽逢レ之。定知流涎三尺。

【訓読】茅屋両三煙竈の間、鬱葱たる茂樾塵寰を隔つ。溪辺時に見る筇を曳く客、応に是れ前村に酒を沽いて還るなるべし。

蘭窓云う。合作。○又云う。汝陽をして之に逢わしめば、定めて知る流涎三尺なるを。

【大意】（絵にかきつけた詩）カヤの屋根が竈の中に二三軒みえる。俗世から離れて鬱蒼と茂った木陰。その時、谷のそ

ばに杖を突いて歩く旅人が現れた。きつと、むこうの村で酒を買って帰って来たのだろう。

阪本蘭窓評。合格点の作品ですな。○付け加えて。飲中八仙歌の汝陽王がこの場面に出くわしたら、きつとよだれを三尺も垂らすだろうよ。

【注釈】○神山桓斎 神山銑次郎。広瀬藩士族、教員等をつとめる（『広瀬町誌』等）。○茅屋両三 白居易・王処士の郊居に題す「陽に向つて茅屋両三間」。左伝・桓公二年「清廟茅屋たり」。杜預注「茅を以て屋を飾るは、儉を著す也」。○張祐・南陵隱静寺に題す「深行す煙靄の間」。○鬱葱 後漢書・光武帝紀・論曰「氣佳なる哉。鬱鬱蒼蒼然たり」。○茂樾 玉篇「樾は、楚両樹陰を交わすの（之）下を謂つて樾と曰う」。道の両側の木陰。汪応辰・法海院龍溪亭に題す「茂樾両つながら蓋を交わす」。○隔塵寰 権徳輿・李城門の官を罷めて嵩陽に帰るを送る「帰りに去る塵寰の外」。陶谷・石橋「故將飛瀑隔塵寰」。もと山寺を形容する仏教的用語。○溪辺 杜甫・落日「溪辺春事幽かなり」。○時見 時はときどきやしばしばのニュアンスもあるが、ここはその時まさに。○曳筇客 崔道融・病起二首其一「筇を曳いて緑苔を傷つく」。筇（平声）は杖（仄声）のかわりに用いる。札記・檀弓上「孔子蚤く作き、手を負いて杖を曳き、門に逍遙す」。○前村 これから行く先の村を指す場合が多いが、ここは前方の村。○沽酒還 論語・郷党「沽酒、市脯は食らわず」。杜甫・醉時歌「酒を沽いて復た疑わず」。○合作 謝赫・古画品録・陸杲「時に合作有り、往往にして人より出づ」。○汝陽 唐代の皇族汝陽王李璣。杜甫・飲中八仙歌に「汝陽三斗始めて天に朝し、道に趨車に逢えば口に涎を流す、恨むらくは封を移して酒泉に向かわざ（不）ることなり」。○流涎三尺 中国近世俗諺の垂涎三尺と飲中八仙歌の流涎を合体した。垂涎三尺は、全字が子音sで始まる双声の語。

24早秋夜作

碧湖漁夫 清水氏 出雲松江人

星文易位朗「秋空」。涼意凄然夜欲中。独立「階前」人「不」見。松陰光小石灯籠。

竹園云。結末実況。宛然如見。○編者云。後半宜園社中口吻。

【訓読】星文位を易えて秋空に朗かなり、涼意凄然として夜中ならんと欲す。独り階前に立ちて人見えず（不）、松陰

光は小なり石灯籠。
ひかりしやう いしどうろう。

竹園云う。結末は実況。宛然として見るが如し。○編者云う。後半は宜園社中の口吻。

【大意】（早秋の夜作った詩）星座は位置を変え秋空に明るく光る。涼しさがまして、ぞっとするような気分、はや真夜中になろうとしている。一人ぼっちで階段の前に立つが他に人はみえない。松の木の陰に小さな光がみえる、あれは石灯籠だ。

渡部竹園評。最後の描写は実見によるであろう。目の前にありありと浮かぶようだ。編者平賀静遠評。詩の後半は、咸宜園の作風。

【注釈】○早秋夜作 韋莊に同題の詩有り。夜作は、あるいは夜起きて作業をすることで、よくくと読むべきかもしれない。後漢書・廉范伝「旧制に民の夜作するを禁じ、以て火災を防ぐ」。○清水碧湖 不明。○星文 顔之推・顔氏家訓・雜藝「星文風氣に及んでは、率ね勞せず（不）して之を為す」。○易位 荀子・賦「天地位を易う」。○朗秋空 許慎・說文解字「朗は明也」。朱熹・擬古八首其四「佳月秋夜に朗らかなり」。○涼意 梅堯臣・和景彝の月に對すに次韻す「蕭蕭たる風雨涼意に変わる」。○凄然 曹丕・吳季重に与うる書「清風夜起こり、悲筋微かに吟ず。樂しみは往き哀しみは来り、凄然として懷を傷つく」。○夜欲中 詩經・小雅・庭燎「夜如何ぞ其れ、夜未だ央ばならず」の央を中と解釈するのによる。屈大均・草堂夜坐の作「眠る無く夜中ならんことを欲す」。○独立階前 馮延巳・花間に酔う其一「独り階前に立てば星又月」。○人不見 孟浩然・檀溪に故人を尋ぬ「田園人見えず（不）」。○松陰 李山甫・方干的隱居「露松陰を洗いて滿院清らかなり」。静かな光景。○石灯籠 中国では石灯という。仏教伝来とともに寺院に導入されたが、今では日本で盛行する。○実況 実際の状況。中国ではあまり使わぬ語。○宛然如見 王融・方山に侍す 応詔「四瀛良に目に在り、八字婉として見るが如し」。袁宏道・公安二聖寺重修天王殿疏「而して文獻宛然として目に在り」。○宜園社 咸宜園。学者、詩人の広瀬淡窓により、文化二年（一八〇五）現大分県日田市に創立された。○口吻 口、口先の意から、話しぶりの意に広がった。皮日休・吳中雨に苦しむ 因つて一百韻を書いて魯望に寄す「詩を吟ずれば口吻囁なり」。具体的にどのような作風をいうか不明。咸宜園二代目塾長広瀬旭莊・秋夜「残肴冷酒三更

ならんと欲す、半酔半醒詩未だ成らず。簷馬嘶かず（不）秋雨寂たり、隣窓灯影夜繰る声」等の境地を指すか。

25 松江秋夕

魚東逸史 山本氏 名良秀 字君英 出雲秋鹿郡人

烏柏霜楓映二緑波。占晴江上夕陽多。孕レ風帆腹便々大。十六丹崖一瞬過。

勉齋云。是詩是画。

【訓読】

烏柏霜楓緑波に映ず。晴を占う江上夕陽多し。風を孕んで帆腹便々として大なり、十六丹崖一瞬に過ぐ。勉齋云。是れ詩、是れ画。

【大意】（松江秋の夕べ）赤いハゼやカエデが緑色の波に照り映えている。明日は晴になるといふ占いか、岸边には夕陽がたつぷり照っている。風をはらむかのように、帆の腹は、ぶつくりと膨らみ、十六丹崖、打ち続く赤いはげ山の群れを一瞬のうちに過ぎていく。

山村勉齋評。詩でもあり、絵でもある。

【注釈】○山本魚東 未詳。魚東は、秋鹿郡魚瀬（おのぜ）港（現松江市）の東という意か。○秋鹿郡 律令以来の郡。ほぼ現在の松江市（一部出雲市）。宍道湖の北、日本海まで。漁業で栄える。明治十二年、郡区町村編制法の施行により、行政区画としての秋鹿郡成立。明治二十九年、郡制の施行により、島根郡・意宇郡と合併して八束郡となった。○烏柏 ナンキンハゼ。烏白とも。楽府・西洲曲「日暮伯勞飛び、風は吹く烏白の樹」。○霜楓 韓愈・青龍寺に遊ぶ、崔大補闕に贈る「霜楓千里帰伴に随う」。○映緑波 楊巨源・水に臨んで花を見る「一樹の紅花緑波に映ず」。○占晴 劉放に占晴題の詩あり。晴を占むとは、読めない。○江上夕陽多 陸游・探梅「青衣江上夕陽紅なり」。許渾・潼関蘭若「高寺夕陽多し」。○孕風 風をはらむ（帆が風を受けて膨らむ）という和語を漢語風にした。○帆腹 蘇軾・八月七日初めて贛に入り惶恐灘を過ぐ「長風客を送り帆腹を添う」。○便々 太つて腹の出ているさま（後漢書・文苑伝・辺韶）。○十六丹崖 現松江市秋鹿町の宍道湖畔に、十六のはげ山が並ぶ奇観（『八束郡志』）。今のフォーゲルパークあたりか。井上円了がこの地を訪れた時の詩「十六丹崖過ぎ、楼に登れば一望新たり。湖光濃きこと酒に似たり、酔殺す幾多の

人」。嵇康・琴賦「丹崖嶮巖、青壁萬尋」。○一瞬過 韓琦・落葉「風霜一瞬に過ぐ」。○是詩是画 蘇軾・東坡題跋・書摩詰「摩詰の（之）詩を味わうに、詩中に画有り。摩詰の（之）画を観るに、画中に詩有り」等を意識するか。

〔付記〕 本稿は、

科研費基盤研究（C）研究課題／領域番号 22K00340

近代漢詩が形成する山陰地域の文化教養環境―漢詩人と官僚・政党政治家の交遊の分析（期間二〇二二～二〇二四年度
研究代表者 要木純一）

及び、

島根大学法文学部山陰研究センター 山陰研究共同プロジェクト 近代漢詩が形成する山陰地域の文化教養環境―漢詩
人と官僚・政党政治家の交遊の分析（番号二二一三 期間二〇二二～二〇二四年度 研究代表者 要木純一）

及び、

島根大学法文学部山陰研究センター 山陰研究プロジェクト 山陰の文学・歴史関係資料の基礎的調査研究と発信・公
開に関するプロジェクト（番号二二〇五 期間二〇二二～二〇二四年度 研究代表者 田中則雄）
による成果の一部である。